

## 人を作る国

### It's Automatic!

緑の海の中に、茶色の線が延びていた。

それは上を簡単に固めただけの道で、西へ向かってまっすぐ走っていた。あたり一面には膝ほどの高さの草が、風の通り抜けるさまを示すように、緩やかに走っていた。近くにも遠くにも、木は一本も見えない。

道の真ん中を、一台のモトラド（注・二輪車。空を飛ばないものだけを指す）が走っていた。後部にあるキャリアには、薄汚れたかばんがくくりつけられている。

モトラドはエンジン音を響かせながら、かなりのスピードで走っているが、全く危なげの無い感じだ。運転者の機嫌を、まるでそのまま表しているかのようだ。

運転手の体軀は細い。黒いジャケットを着て、腰を太いベルトで締めていた。ベルトにはポーチがいくつかついて、後ろにはハンド・パースエイダー（注・パースエイダーは銃器。この場合は拳銃）のホルスターをつけている。その中には自動操作式パースエイダーが一丁、グリップを上にして入っていた。

右腿にはもう一丁、リヴォルバータイプのハンド・パースエイダーがホルスターに収まっている。抜け落ちないように、ハンマーがホルスターから短く伸びた紐を噛んでいた。

帽子は飛行帽のような、前だけに鍔がついたもので、防寒用に耳を覆ったれが着いていた。たれはゴーグルのバンドで押さえつけられ、あまりが風でばたと暴れている。代わりに帽子本体が風圧ですっ飛んでいくのを防いでいた。

モトラドが運転手に言った。

「ねえ、キノ。さっきのキャラバンでは随分悩んでたけど、何を買ったの？」

キノと呼ばれた運転手はこう言い返した。

「け、携帯食料だよ」

モトラドが、小石を踏んで少し揺らぐ。

「それにしても時間がかかったね。あれ？でも携帯食料は前の国で安く仕入れたからしばらく要らないって言ってなかったっけ？」

「何事も、備えあれば憂い無しだよ」

「ふーん。裏でこそしてるからさっきり大人のおもちやでも買ってるのかと思ったよ」

「……………考えすぎだよ」

傾き始めた日の光を受けながら、キノの頬を、一筋の汗が流れていった。

目指す国は、もうすぐそこだ。

「こんにちは、旅人さん。我が国へようこそ」

その国の城壁外側、城門脇にある窓口で、入国審査官はモトラドに乗ってやってきた旅

人に挨拶した。

「こんにちは。ボクはキノ、こちらはエルメス。観光と休養で入国させてください。今日を入れて三日間を希望します」

キノがそう言うと、審査官は書類と筆記用具を差し出した。

「それではこちらの方に記入をお願いいたします」

キノはそれを受け取り、次々と記入していく。

氏名、性別、生年月日、罹患歴の有無……多少仰々しくはあったが、これまで行ってきた国とあまり大差は無い。数分もせずに、キノは全ての欄を埋め、審査官に書類を返した。

審査官はそれをチェックしながら、入国手続きを進めていた。

「はい、有難うございます……おや？二枚目が記入されていませんが」

「え？二枚目が有ったんですか？それは失念していました。すぐ記入しなおします」

受け取ろうと手を伸ばすキノ。しかし入国審査官は手を振った。

「いえいえ、ホンの数問なので口頭で行きましょう。では1つ目。生理は来てますか？」

「え、ええ？」

一瞬自分の耳を疑うキノ。いくらご無沙汰とはいえ、空耳にも程がある。

「あ、スイマセン。聞こえづらかったですかね。生理は、来てますか？」

「は、はい……」

どうやら空耳ではなかったようだ。与えられる質問に、少し恥ずかしがりながらも、正しく応えていく。そして、キノの動揺を知ってか知らずか、審査官は次々と質問を出してきた。

「性交渉の経験はありますか？」

「はい……」

「性病に罹ったことは？」

「ないです」

「子供を欲しいと思った事は？」

「ありません」

「結婚願望は？」

「今のところは……」

顔が赤いのは、決して夕焼け空のせいだけではない。

「綺麗な国だね」

城門をくぐり終え、エルメスが声をかけてきた。

「だね。久しぶりに、モダンで整った国に来た。入国審査がちょっとアレだったけどね」

まだ赤みの抜けきらない顔で、キノは答えた。

キノとエルメスの目の前には、完成された町並みが広がっていた。何本にも並ぶ、整った太い道路。あちこちに設けられた、緑の豊かな公園。国の中央に立ち並ぶ、外見も配置

も美しくデザインされた建造物。

傾いた陽光に照らされるその姿が、機能美も相まってひとつの絵画にも見えた。

「さて、どうする？キノ」

「今日はもう泊まるところを探そう。散策は明日だ」

「りょーかい」

エルメスが言った時、目の前で車が一台止まった。荷台つきの車で、誰も乗っていない。車に積まれた機械が、どうぞお乗りください、目的地までお連れします、と告げる。

キノが値段を聞いて、その必要はないと返事が来た。

「どうする？エルメス。乗っちゃっていいかい？」

「いいんじゃない？ホテルとか、自分で探すよりは早いでしょ」

「分かった」

キノは、エルメスを荷台に押し載せようとした。すると自動的にクレーンが伸びて、エルメスをひよいと吊って載せた。すぐにベルトと車輪止めが出てきて、固定した。

「ちよつと前にも、こんなこと無かったかな？ま、いいや」

キノが座席に乗る。やはり自動的にベルトが締められて、車は走り出した。

広い道を、他車と一定の間隔を取りながら走った。公園では、遊び終えたらしい子供たちが車に乗り込んでいるのが見えた。

そして車は、ビルの並ぶ中心街へ向かう。

到着したのは、綺麗で立派なホテルだった。玄関でボーイが迎えた。宿泊の料金は全く取らないという。

キノとエルメスは小型の車に乗せられ、座ったまま立派な部屋まで案内された。ボーイが、「「じゅっくり」と言って、部屋を出て行った。

「楽な国だね」

キノが、ジャケットを脱ぎながらいった。

「居る意味なし」

エルメスが言った。キノは荷物を降ろしながら、

「△ストレスをもらう国Vに似てる気がしたけど、みんな普通に仕事をしているみたいだし。ただ単純に機械が発展しているだけなんだろうね」

「つまんない？」

「とんでもない」

キノは下着を脱ぎながら言った。

「只で熱いシャワーも、真っ白なシーツも、おいしい食事もあるんだ。満喫しないほうがどうかしてるよ」

と言って、シャワールームに消えていった。

「びんぼーしょー」

「ふう……」

まずは左腕から、右腕、胸、腹……長旅で付いた汗と汚れを、丁寧に落としていく。

雪のように白い足がゆつくりと湯船に近づいていった瞬間、ざわっと水面が揺らいた。

「え！？なにっ！？……んくっ！」

突然、キノの右足がお湯の中に引き込まれていた。

「何だ、これ！？……うああっ！」

左足で踏ん張りながら、キノは右足を引き上げようとするが、何かが引っかかったよう  
でどうにもならない。

そして、再び水面が揺らいたかと思うと、ジュルジュルという粘着性の音とともにキノ  
の左足にも何かが絡みつく。

「い、いやっ……んんっ！」

驚きで見開かれたキノの瞳に、湯船から這い出した半透明上でゲル状の何かが映った。

「ひいつ、いやあ……いやああっ！？」

必死に逃れようとするキノを嘲笑うかのように、その何かはキノの足首から太腿、そし  
て全身をゆつくりと覆っていった。

「んっ……んんっ……いやっ……助けて……」

今やキノの体は、首から上のわずかな部分だけを残して、その半透明の代物に覆われて  
いた。

「くっ……しまっ……全然動け……あうふうっ……！」

突然、その「何か」がぐねぐねと激しく蠢き出し、キノの口から悲鳴とは違う艶っぽい  
叫びが上がった。

「あんっ……いやあ、やめ……てえ……んああっ！」

半透明のそれがじゅるじゅると音を立てて蠢き、キノの体中をゆつくりと刺激していく。  
特に尻の辺りのそれは大きくうねり、キノの引き締まった太腿や尻を上下左右に揉み  
だしている。

「んあっ……んっく……いや、いやあっ……んっ！」

いつの間にか胸も攻めだしたそれに、揉まれる双丘の中心がぶっくりと紅く膨らんでい  
た。

「何か」は乳房をぐねぐねと揉みながら、一方で勃起した乳首を全く違った形で捻って  
いく。

「ふああっ！な、何だっ。これっ！」

人では有り得ない形で刺激を加えられ、キノの体がびくびくと激しく震える。

「くっ……んっ……ど、どうして……そんな……んああっ！」

そして、敏感な乳房だけでなく、背中、腹、爪先……全身のあらゆる性感帯がねっとり  
としたゲルによって刺激されていく。

「ふぁ……だめ……だめ……やめ、て……いや……感じたくないのに……あぁんっ！」

その言葉とは裏腹に、キノは全身を淫らにくねらせ、それは全身を覆うゲルの脈動にはつきりと呼応していた。

「んっ……んんっ……あふうっ！」

そして、その間断の無い刺激によって、キノの官能はあっという間に高められていく。

「んっ……くう……こんなの……感じちゃ……でも、ふぁあぁっ！」

キノの口から艶のこもった喘ぎが漏れ始めると、それを待ちかねていたかのように、その動きが変わった。

「えっ！？な、なに……んんんっ！」

下半身を覆ったそれが外に向かって動き、固く閉じられていたキノの足をゆっくりと開いていく。

「いやぁ……やめてえ……だめ、だめええっ！」

抵抗するキノを嘲笑うかのように、それはぐちゅぐちゅと蠢いて、容赦なく抵抗力を奪っていく。

「あぁ……いや、いやあぁっ！」

薄くだが形のそろった陰毛、ぷっくりと膨らんだ陰唇と、その中心の真っ赤な果肉、尻たぶの奥にある蕾までが全て晒される。

だが、股間を覆ったその脈動によって、外から見えるキノの秘所は一定の形をとるとなく常に蠢いていた。

「んくっ！……やめ……てえ。弄らないで……あぁ……だめえっ！」

秘所への刺激にキノは抗うことが出来ず、涎をたらだらとたらしながら、全身を震わせる。

既に肉体は謎の生物の与える快感を受け入れ、理性もそれに押し流される寸前のようだ。

「ふぁ、あんっ……どうして……こんなに……ボクの、感じて……るんだ。こんなの……

……こんなのおっ！」

キノの嬌声の高まりに応じて、股間の辺りが怪しく蠢き、中から棒状の突起が生え始めてくる。

その瞬間、意思など持ちようもなさそうなその目的を悟り、キノが狂ったように激しく身もだえした。

「いやぁ！それだけは……だめ、やだっ……んんんっ、あんっ！」

そんなキノの言葉とは裏腹に、体はその巧み過ぎる刺激によって既に十分すぎるほど潤んでいた。

その証拠に、膣内から溢れ出した愛液がその粘膜と反応し、股間の辺りでじゅくじゅくと泡立つような音を立てている。

「あぁ……いや。このままじゃ、ボク……こんなものに……犯さ……て……んんんっ！」

それは、半透明の蛇のような触手を作り上げると、キノの眼前でゆらゆらとそれを動か

した。

「い……いやあああああ！やだあああああ！」

だが、キノの懇願に耳も貸さず　元々無さそうだが　触手は鎌首をもたげて、ぶくりと膨れた先端をキノの秘裂に一気に突き入れた。

「やああああっ！……な、なに、これえっ……っ！」

びくんつと激しく体を弓なりに曲げて、キノが甲高い喘ぎを出した。

触手は、人のペニスではありえない動きで肉壁を抉りながら、根本から脈動してその太さを変えていく。

「ふああっ……やあ、中で、大きく……なつて……こんな、こんなのお……うくうっ！」  
たつぷりと膨らんだ触手で、キノの膣は両手で輪を作ったほどに広げられていた。

「いやあ……まさか、まさかあ……」

半透明のそれを通して、淫らな紅色をしたキノの肉壁はおるか、その奥の子宮の形までがはっきりと見える。

まるで極限まで広がったキノの皮肉が、自ら快楽を求めてうねっているようだった。

「んんっ……ああ……こんな……の、初め……てえ……んふうっっ！」

触手のほとんどがキノの膣に埋め込まれたかと思うと、ずるずると音を立てて一気に引き出される。

その度に、キノの愛液が噴水のように進り、じゅくじゅくと音を立ててゲルと反応した。

「ふああ……いい、いいの……とても……ああ、感じる……感じるうっ……っ！」

既に理性は残っていないのか、キノは大きく開けた口から舌を突き出して、体を激しくくねらせた。

「もつと……もつと動かして……ボクの中で……たくさん、動かしてえっ！」

その言葉に応えるように触手の動きが激しくなり、遂にはその長さの全てをキノの中に埋め込んで、膣内をかき回す。

「ふああんっ！……すごいいっ！いいっ……いいの。イキそう、イキそうっ！おまんこイキそうっ……」

髪を振り乱して淫らな言葉を口にするキノの体が、びくびくと激しく震える。

「ふあああああああああっっ……」

キノは、雷に打たれたようにがくんと激しく身を仰け反らせて絶頂に達した。

「あんう……ああ……すこい……こんなの……ふああああっ！」

キノにその余韻を楽しませる間も与えず、決して絶頂を迎えることの無い触手はキノに刺激を加え続けた。

触手の動きはますます激しくなり、前後に出し入れされるたびに、肥大したキノの膣壁がズリッ、ズリッ和外にめくれかえって行く。

「ふああ……だめえ……イッたのお……にい……そんな風に、動かしちゃ……だめえ……んくうっっ……」

高まり続ける快感にキノの体が小さく痙攣し始めるが、触手の動きは収まるどころか益々その荒々しさを増していく。

「ふああっ……だめえ。イクっ、イクツッ……またイクっ！ああああっん！」

そのまま背骨が折れてしまふと思えるほど激しく背筋を仰け反らせ、キノが再び絶頂に達した。

しかし、触手の動きは衰えることが無く、キノの快感のわずかな収まりも許そうとはしない。

「ああ……らめえ……もう……ボクッ、狂って……ふああっ！」

止め処ない快感に、その言葉も徐々に呂律が回らなくなってくる。

そんなキノの快楽をさらに貪るように、股間の辺りから新たな突起がぶくぶくと生まれしてきた。

肉垂で蠢き続ける触手よりも小さなそれは、だらしなく広げられたキノの股間の後ろをかき回す。

「ふぁ……やえれえ……おひりは……そんなこは……あぁ……らめえ……」

だが、透けて見えるキノの菊門は小さな口をひくひくと震わせ、触手の挿入を今か、今かと待ち受けている。

一瞬、怪しく蠢く触手が止まったかと思うと、それらは一気に蛇が噛み付くようにキノのアナルに潜り込んだ。

「ふぁああああああんっ！」

茶色の蕾がグイッと広げられた瞬間、キノはがくんがくんと何度も体を痙攣させて、再び絶頂に達していた。

「んふぁ……ぁあ……らめえ……らめなのに……気持ち……いいのぉ……あぁ……っ」

キノは焦点をすっかり失った目で、身悶えすることも出来ずに、ただひくひくと痙攣を繰り返している。

「随分長風呂だったね、キノ」

風呂上がりにエルメスがたずねる。

「うん、結構珍しいお風呂だね。つついっ長湯してしまったよ。あー気持ちよかった」

バスタオルを体に巻き、ゆっくりと髪を拭く。

やたら機嫌がよろしいらしく、珍しく鼻歌まで歌っている。

「まったく、少しは声を落としてくれないと。聞かされるこっちの身にもなって欲しいもんだよ」

何の事を言われているのか思い至ったキノは、顔を真っ赤にしながら、やや乱暴に、ガシガシと髪を拭く。

「い、いいじゃないか。久しぶりなんだからっ。もう寝る、お休み！」

と言いつち、そのままふかふかのベッドに飛び込んだかと思うと、すぐに寝息を立て始

めた。

「やっぱりただのびんぼーしょーじゃん」

次の日、キノは夜明けとともに起きた。

昨晩の反動か、少々腰が重たかったが、いつもどおり、運動とパースエイダーの訓練をし、シャワーを浴びた。ただ、湯船には近づかなかった。朝からあんなことをされては、たまらない。

朝食をとり、いつもより少し遅めに、エルメスを叩いて起こした。

「今日はどうするの、キノ？」

「うん。こういう国は行政が集まる市街地とベッドタウンの居住地が別々になった構造らしいから、今日はまず居住地からざっとまわろうかと思っっているよ」

「また『アレ』に乗って？」

エルメスは、昨日の大きい車の事を指して言った。

「いや。大事な相棒のエンジンが腐られても困るしね」

機械的な町並みの執政区・工業区を抜けると、広大な草原をたたえる畜産区に入った。

「広いね」

「そうだね。この国の広さも、今まで旅してきた国の中でも1・2の広さだからね」

司法や立法など政治の中心である執政区も十分な広さだったが、その倍の面積を持つ工業区、さらにその倍の面積がある畜産区、またその倍の面積がある農業区、という形で、この国は構成されていた。

衣食住の全てを国内産のものでまかなっている。ここ数十年の良政もあり、国土はさらに広がりを見せている。

「でも……」

「子供も多いし、まだまだ発展しそくない国に、何か不満でもあるの？」

キノの漏らしたつぶやきに、エルメスが疑問を投げる。

「うーん、何かこう、決定的にこの国に欠けているものが有るような気がするんだよ、エルメス」

「船がグラグラしてる感じ、ってやつだね」

「胸がモヤモヤ？」

「そうそれ」

それは苦しすぎだよ、と心の中で突っ込んでおく。

太陽がまもなく中天に差し掛かる頃、穀倉地帯の中に立つ人物に声を掛けられた。

「今日は！旅人さん！」

話しかけてきたのは、作業着を身にまとった二十代ぐらいの女性だった。

「今日は、ボクはキノ。こっちはエルメス」

「はろ〜」

「よろしく、キノさん、エルメスさん。私はシリイ、この辺りでライ麦を育てているの。ねえ、キノさん？お昼ご飯はもういただきましたか？」

「いえ、まだですが」

「じゃあ、我が家にお呼ばれされない？今からお昼を食べに帰る所で、すぐそこなの。いかがかしら？ぜひ旅の話とかを聞かせて欲しいわ。私特製のライ麦パンのサンドイッチもご馳走するわよ」

その時、キノのお腹から、ぐくぐーっと言っ音が聞こえた。二人は目を合わせると、一人はにっこりと、もう一人ははにかみながら笑い、ゆっくりと歩いて行った。

シリイの家は、低い丘の上に建てられていた。

キノは彼女にすすめられ、ダイニングの椅子に座った。エルメスが、その後ろにセントラストランドで立つ。

昼食をとりながら二人と一台は、今までの旅であっただいりんなことを話した。楽しかったこと、嬉しかったこと、悔しかったこと、残念だったこと……シリイはその度に、一緒に喜び、悔しがり、悲しんだ。

「楽しい話をありがとう、キノさん。外の人とお話が出来る機会は少ないんですよ。この国は、今のところどうですか？」

「長閑で良い所ですね。国内の産業だけで衣食住を全てまかっている国はそう有りませんし、国が潤っている証拠です」

「ええその通り、私はこの国が好きよ。でも……」

「退屈」

エルメスが言った。

シリイは笑いながら、

「全くそのとおり。実際この国は退屈なの。景色もいーし、重厚で素晴らしい歴史を持ち、平和で、治安もいーのんびりとした生活が楽しめる。でも、私たちには楽しさがないの」

「ああそれで……」

キノは胸の霽が晴れていく気がした。

「どういうこと、キノ？」

「この国には、娯楽がなかったんだよ」

「そうなんです。十数代前の行政長の政策で、この国には娯楽といえるものがほとんど消されてしまったの。『娯楽があるから国民はさぼる。それでは国は発展しない』ってね」

「なるほど……でも、それでは皆さんは納得しなかったでしょっ？」

「もちろんよー！」

と言って、シリイはデザートのフルーツを持ってきた。それを食べながら、二人は話を続ける。

「だから、旅人さんが通るときは絶好のお話日和、という訳。キノさんが私の所に来てくださってとても感謝してるわ」

「でもそれじゃあ普段どうしているんですか？歴史的に見ても娯楽のない国は往々にして内部崩壊していくものですが、この国にはその兆候が見え……？」

キノは、目の前が少しふらついていることに気がついた。少し呼吸も荒くなっているような感じもする。

「あれ……？なぜ……？」

「いかがかしらキノさん？この国特産のフルーツのお味は？」

「一体……どういうこと、ですか……？」

シリイはキノの後ろに立ち、ゆっくり肩を抱きしめた。

「さつきキノさんが食べたのは、遣伝子組み換えで成分の中に脳内麻薬を発生させるものが組み込まれたフルーツなの。言ったわよね、娯楽のない国は崩壊するって。でもね、この国には、ちゃんと娯楽はあるわよ。キノさんは、昨日お風呂に入ったわよね？女の子なんだから」

キノは、昨晚風呂場で起きた出来事を思い出し、少し顔を赤らめた。

「ま、さか……」

「うふふ……ちゅっ」

シリイはキノの耳朶にそっと口付ける。それだけでキノは全身を震わせ、目の焦点を失う。

「やっぱりほっとかれるんだね」

エルメスが、そっとぼやいた。

「どう？気持ちいいでしょあ？」

頬や首筋にキスを落としながら、シリイが尋ねる。

「ふっ……んっ！そんな……こと……ありません……」

「感じてないなんて、嘘ばかり」

「ほんとう……です……」

「ふう〜ん……こんなに、乳首……尖ってるのにな？」

ジャケットの胸元を広げると、シリイの指が、キノの乳首をつまみあげた。

既に存分に愛撫を受けた後のためか、言葉の通り、キノの乳首は、「ピン」と、そそり立っている。

「こんなに、コリコリにしちゃってさ……やらしいんだから、キノさんってば」

「きゃふ……う、そんなこと……ありません……ひぁっ！」

「ほりほり。ふふ、こするたびにビクビクして、おもしろ〜い」

「し、シリイさん……ひっ、人の体で、遊ばないでくだ……あぁっ……さい……っ」  
「聞こえなあくい。ほりっ、ほりほりっ」

「あくっ！ひゃんっ！……んぁっ！あっ！あっ、そんなに、いじったら……だめえっ！」  
シリイの細い指が……キノの胸を揉みしだいていく。

ささやかな膨らみでも、執拗に揉まれて形を変えるさまは、すごくいやらしい。

「ふふーん。すっごいコリコリ。キノさんの乳首、勃起してるねえ」

「シ、シリイさんが……いじるから、です……んぁっ……も、もう……やめて……」  
「ほんとにやめていいのかなぁ……」

剥き出しになった、キノの肩や脇腹に、繊細なタッチでシリイの指が這い回っていく。

キノの白い肌が、快感にほの紅く染まっていく。すでに全身の力は抜け、腰は淫らにくねり出していた。

「くぁ……あ……あぁっ、んっ……んっっ」

「ほおら、いやらしい声になってきた……。んぶ、キノさんの耳、すっごく熱くなってるね……あむっ」

「あぁっ！みみダメえっ……っ！」

「はむはむ、んー……れろ、くちゅ……」

真っ赤に染まったキノの耳を、シリイの舌が犯していく。

乳首をいじりながら、空いた手が、下半身に向かって肌を滑っていった。

「こっちもお……触って欲しいんですよ」

「そ、そんなこと、ありま……せんってば……あぁ……」

言葉とは裏腹に、シリイの手に逆らうことなく、キノの股が開く。

キノの下着は、すでにじっとり濡れ、舟形のシミの向こうに、ピンク色の秘唇が透けて見えた。

「すました顔してても、キノさんはスケベな子なんだね……ほおら、もう、下着がいやらしいお汁でびしょびしょだよ」

「きやぶうっ……んぁ、やめてえ……そこ、だめなお……」

「そこっでどこぁ〜？ほれほれ」

「んやぁんっ！く、くりちゃん……だめです……ふやぁっ！」

濡れた下着の上から、シリイの指が小さな突起を押さえ、こねまわしていく。

指と下着の間に愛液が糸を引き、部屋にクチュクチュと湿った音が木霊する。

「もっくたってなっっちゃって……気持ちいいんですよ？」

「んやっ……あっ、あふっ、ひっ……ひんうっ！」

下着越しに直接割れ目とクリをいじられ、乳首と耳を責め立てられて、キノは完全に蕩けている。

シリイに耳を甘噛みされ、あるいは乳首を擦られるたびに、ビクビクっとな腰を揺すり上げ……敏感な部分をシリイの指にこすりつける。

「ほらあ……自分ばかり気持ちよくなってないで、私にもしてよあ」

「え……シリイさん、にも……？」

「そう。ね、私も、キノさんのオマンコ、舐めてあげるから……」

「でも……そんなの……」

「なによあ、ココ、舐めて欲しくないのあ？」

「ひゃんっ！ん……あ……あ……なめて……ほしい……」

「そうそう、そうやって素直にしてなよね……ん、なんか、私も濡れてきちゃった……早くう……舐めて」

「ふあ……はい……」

二人はベッドに移動すると、お互いの股間に顔を寄せていく。

「んっ……ふあっ……キノさんのオマンコ……すっごい、グチヨグチヨだよあ……」

「シ、シリイさんの……だつて……んくっ、いっぱい……溢れて……ますっ……」

お互いに足を開きあい、露になった秘唇に舌を這わせ、愛液を啜り合う。

舌や指が踊るたびに、びくびくと足が動くのが、とてもいやらしい。

「キノさんのオマンコ、ひくひくしてるっ、んっ……んっ、ちゅっ……」

「ふあっ！し、シリイさんの、だつて……いっぱい、濡れてます……んうっ！」

「ひゃん！そこあ……気持ちいいのあ……」

くねくねとお尻を揺すりながら、お互いのオマンコに愛撫を加える。

部屋の中には、二人分の熱気が籠って、ピンク色に染まっているような感じすらある。

「んはあ……キノさんの、クリちゃん……すっごく膨らんで……勃起してるよあ……んぶ

ぶ……クリちゃんに、フェラしてあげる。んくっ……んっ、ちゅっ……んはっ

「ひうっ！む、剥いちや……ダメです！ダメ！ダメえ……んっ！はあうっ！」

「んっ、ちゅっ、ちゅっちゅっちゅっ」

「そ、そんなに、されたら……あつ、あつひああっ！」

ちゅっっつと、シリイがクリを吸い上げ、舌を絡めていく。

キノはシリイの舌に翻弄され、愛撫を放棄して身悶える。

「だめっ、クリちゃん……吸っちゃダメえっ！ダメなのあっ！」

「んっ？」

ちゅばっつと。キノから口を離すシリイ。

内股を濡れた指でなぞりながら、意地悪そうな微笑を浮かべる。

「なんでダメなのあ？クリちゃんいじられるのヤなんだ？」

「いや……というか……」

「ちがうのあ？じゃあ、どうしてクリちゃんダメなのあ？」

頬を紅潮させて微笑みながら、シリイはふたたび、キノの股間に顔を埋める。

「きやうっ！あつ、あつ、ああっ！」

舌の動きに合わせ、キノの腰がビクビクと跳ね上がる。

「ろおひへ〜?(どおして〜?)」

「ひゃっ……ふぁっ……あっ……だ、だって……イ、イキそ……お……に、なっちゃ……うっ……」

「ふうくん、イっちゃうんだあ。キノさんは、私にクリ舐められて、イっちゃうんだねえ」

「いやあ……やだ……言わないで下さい……」

「だーめ。ほら、イっちゃえ」

そう言うと、シリイは本格的に舌を使い始めた。

「ひゃああんっ！ーあ、そっ、そこおっ！だめえっ……」

「んくっ、んっ、んっ……ちゅむ……んは」

「だめ、だめなお……剥いてちゅうちゅうしないでっ！舐めちゃだめですっっ！ー」

「んっ、ちゅっ、んぁ……ぶん、んっ……」

「んあっ、あっ、あっ、あぁっ！く、クリトリス……クリトリス勃起しちゃうっ！おっきくなっちゃうっ！ー」

「んくっ、キノさんのオチンチン、いっぱい勃起してるよ」

「そんな風に言わないで下さい……ひゅあっ！だめえっ！ジュボジュボしないでえっ！」

「すっごあい、キノさんのオマンコ、ひくひくして、いっぱいお汁出てるよあ……ほんと、いやらしいオマンコ」

「あぁっ！もうダメっ！ダメなおっ！イっちゃうのおっ！」

「ふふ……私にクリトリスおしゃぶりされてイっちゃうんだね……いっぱいフェラチオしてあげる。ジュボジュボして、キノさんがスケベな子だって教えてあげる」

「やぁっ！もうだめっ！イクっ、イクの、イっちゃうのおっ！あっ、あっ、いやあぁぁっ！ー」  
キノの背中が痙攣しながら反り返った。

同時に、まるで本当にフェラチオされたペニスのように、キノの膣口から、ぴゅっぴゅっつと潮が噴き出される。

「ふぁ……あっ……ふゃ、あぶ……」

「ふふ、顔射されちゃったあ……」

顔をぬらした愛液をぺろっつと舐めて、シリイは微笑んだ。

日も昇らないような早朝にキノは目を覚ました。

その後、完全にシリイに馴らされてしまったキノは、夕食を口移して受けたあと、深夜遅くまで体を重ねていた。

そんな昨日の情事の跡が生々しい部屋をそっと抜け出し、エルメスを叩いて起こす。

「こんなに朝早く、どうしたのキノ？」

そんなエルメスの声に耳もくねず、かなり急いで出国の準備をする。

そしてそのまま、シリイを起こすことなく家を辞す。

「どうしちゃったの？こんなに急ぐなんて。それともこれがこの国の流行？」

全ての質問に一切答えず、キノはただ国の外を目指した。そして国外に出ても、キノはエルメスを走らせ続けた。

「あ……」

薄っすらと太陽が昇り始めた頃、キノはエルメスを停車させ、ぐったりとした表情でようやく口を開いた。

「あ？」

「危なかった……」

「それが今までの質問の答え？」

「うん……あの国にあのままいると、ボクはなんだか抜け出せなくなっていったような気がするよ、エルメス」

「そんなに気に入ったの？」

驚いた声で、エルメスは言った。その質問に、キノは遠いところを見ながら答えた。

「旅人にとって人を作る作業は、たまにするからいいんだよ」

そういつて今度は、先ほどよりは優しく、アクセルを入れた。